

落胤

テ兔モ角モ成給ヘト申、此曹子ト申ハ、今井四郎兼平ガ妹ノ腹也ケリ、去バ木曾ガ爲ニハ、乳人子ヲ思テ儲タル子生年十一ニゾ成ケル、

〔松屋筆記 七十一〕おとしだね 井落胤腹

蜻蛉日記上卷十丁左解環本上に、孫王のひがみたりしみこのおとしだねなり云々、源平盛衰記

卅二の卷十八丁右に、落胤腹云々、色葉字類抄五卷の良部疊字門に、落胤ラクキン云々、下學集態藝門卷下

右三丁に、落胤腹、ラクキンバラ云々、節用集良部言辭門に、落胤、ラクキン云々、運歩色葉羅部に、落胤

腹、ラクキンバラ云々、

後子

〔伊呂波字類抄末倫〕後子マ、ハ、コ無服親也

〔落窪物語〕今はむかし、中納言なる人の、むすめあまたをもちたまへるおはしき、大君、中の君に

は、むことりして、西のたいひがしのたいにはなぐとしてすませたてまつり給ふに、三四の君

に裳きせたてまつり給はんとて、かしづきぞし給ふ、又ときくかよひ給ひけるわかう本、作、う、ん

とをりばらの君とて、は、もなき御むすめおはす、北のかたこ、ろやいか、おはしけん、つかう

まつるこだちのかずにだにおぼさず、えんでんのはなちいでのみたひとまなる、おちくぼなる

ところのふたまなるになんすませ給ひける、きんだちともいはず、御かたきはましていはせた

まふべくもあらず、名をつげんとすれば、さすがにおと、のおほす、心有、おみ給ひて、お

ちくぼの君といへとのたまへば、人々も、さいふま、にて、わりなきこと給はかりけり、

〔沙石集 七下〕繼女蛇欲合事

下總國ニ、或者ノ妻十二三バカリナル繼女ヲ、大ナル沼ノ畔ヘグシテ往テ、此沼ノ主ニ申、三ノ女

ヲ參セテ、ムコニシマイラセント度々云ケリ、アル時、世間サマジク風吹空曇ル時、又例ノヤ

ウニイヒケリ、此女殊ニオソロシク身ノ毛イヨダツ、沼ノ水浪夕チ、カゼオラケシテ見ヘザレバ、